

「臨床のための QOL 評価ハンドブック」

池上 直己
 福原 俊一 編集
 下妻晃二郎
 池田 俊也

自治医科大学学長

高 久 史 磨

2001 年 4 月に池上直己、福原俊一、下妻晃二郎、池田俊也の 4 氏の編集による「臨床のための QOL 評価ハンドブック」が医学書院から刊行された。患者の QOL という言葉が医療の現場で使われるようになってから久しいが、QOL が key word のような形で使われることが多く、その定義は必ずしも明確なものではなかった。QOL を問題にするならば、当然その評価が必要であり、現在国際的、国内的に広く用いられている評価方法が存在しているが、臨床家の多くは評価の尺度として有名な SF-36 などについてもあまり知識がなく、漠然とした概念で QOL という言葉を使っているのが現状である。

本書はその QOL 評価のためのハンドブックとして刊行されたものであり、上記の 4 人の編者と 20 人の執筆者(編者も含む)によって QOL の評価に関する説明が詳細になされている。本書の内容は 3 部に分かれ

ており、第 1 部の総論編では、「いままなず QOL か—患者立場方アウトカムとしての位置づけ」と QOL 測定理論について、第 2 部の包括的尺度の所では SF-36 を中心とする健康プロファイル型尺度と EQ-5D を中心とする選択に基づく尺度のことが説明されている。また第 3 部の疾患特異的尺度では、がん、呼吸器疾患(慢性閉塞性肺疾患、気管支喘息など)、糖尿病、慢性腎疾患、泌尿器疾患(排尿障害、男性性機能障害)、消化器疾患(胃食道逆流症、アカラシア、炎症性腸疾患、慢性肝炎、慢性膵炎など)、精神科領域(うつ、睡眠障害)、神経内科疾患(てんかん、アルツハイマー、パーキンソン病、片頭痛)、リウマチ疾患、骨粗鬆症が取り上げられ、これらの疾患における QOL 評価法が紹介されている。疾患特異的尺度というと、多くの人はまずがん患者の QOL を思い浮かべるが、実際には上記のように数多くの疾患で QOL の評価が行わ

れていることに驚かれる方が多いと思う。

患者中心の医療という言葉が最近よく使われるようになったが、生活習慣病に代表される慢性疾患の患者が増加している現状を考えると、治療の効果を患者の視点から判定する QOL の評価の重要性が今後益々強調されるようになると考えられる。その意味で今回医学書院から「臨床のための QOL 評価ハンドブック」が刊行されたことは誠に時宜を得たものと言える。私も目を通して見たが、専門的なことに関してもわかりやすく説明されており、臨床の現場にある医師たちにぜひ本書を一読され、患者の QOL ということを新しい観点から考えていただくよう要望したい。

● A 4 頁 160 図 31 写真 1 表 42
 2001 定価(本体 2,800 円+税) 送料実費

—医学書院 刊(☎ 03-3817-5657)